

7年前、「日本におけるイタリア 2001-2002年」の催しが終わった時、当時のカルロ・アゼリオ・チャンピ共和国大統領はイタリアと日本の主催者をカイリナーレ宮に招き、日本という要望が多く、洗練された国に対してイタリアのあらゆる分野のイメージを紹介するという、野心ある目標が達成されたことを強調しました。

この大きな事業の成果は、二国の人々との友好関係をさらに深めたことにあります。

今日、伊日財団の十周年を記念するこの本がここ日本で紹介され、しかもそれが、カルロ・アゼリオ・チャンピの後を継いだジョルジョ・ナポリターノ共和国大統領が、11年ぶりに公式訪日して明仁天皇陛下に表敬訪問されるという機会に行われることになりました。

あれから今までの間に日本とイタリアの二国間関係は、中断や減退することなく、大きく前進しました。その歩みの少なからぬ部分には伊日財団が功績したことは、疑いの余地がありません。伊日財団は、官民が一体となった財団という、これまでに例を見ない、革新的な、初めてのケースです。イタリアが、政府機関や公共機関を通じて、民間企業の協力を得て、このような官民の参加と協力を可能にする独創性のある手段を有し、友好国との推進・共同プログラムにおいて組織的かつ効果的に行動するということは、過去に一度もなかったことでした。

この熱意の結果、特に目に見える結果は、誰の目にも明らかです。「イタリアの需要」は日本において高く、休むことを知りません。

そしてイタリアにおいても、この大国に対する愛が中断したことは一度もありません。このことは、トリアヌス帝のフォロのようなローマで最も象徴的な場所に、日本人彫刻家である安田侃のモニュメント作品が設置されたという事実を見ても明らかです。作品は、現代と石、二千年前の文化の芸術による□話を語る証言なのです。

さて、日本は私たちにとって遠く、近い国です。その日本において、イタリアは、文化や才能の歴史的遺産だけではなく、ロボット工学、物理学、遺伝子工学、数学、研究など、イタリアが多くの分野で有する一戦級の能力についても紹介します。これらは将来性に満ちた未来が約束されている分野なのです。

伊日財団□会長
ウンベルト・ヴァッターニ